



Title	エチオピア・アムハラの織布
Author(s)	板垣, 順平
Citation	デザイン理論. 2012, 59, p. 84-85
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53536
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

エチオピア・アムハラ の織布

板垣順平／大阪芸術大学

1. はじめに

今日のエチオピアは、急激な経済発展を遂げようとする開発途上国のひとつである。首都アディス・アベバには高層ビルが多く立ち並び、行き交う人びとも携帯電話を片手に、ジーンズやシャツなどの欧米スタイルの衣服で闊歩している。その一方で、土器や鉄製品、革製品、織布などの手工芸の製作を生業とする人びともいる。

発表者の研究対象は、エチオピア北部のアビシニア高地一帯を出自として、現在では全土に居住しているアムハラの人びとである。彼らが居住するエチオピア北部では、古くから「織布」が利用され、現代でも日常着や教会への参詣などに広く用いられており、人びとの生活に深く結びついている。

しかし、エチオピアの織布に関する研究は今なお少なく、一部の研究者のあいだで僅かに取り上げられる程度にとどまっている。

そこで、こうしたアムハラ の織布の歴史を概観するとともに、その機能的要素と装飾的要素を検討してアムハラの人びとの織布に対する価値観や意識の在り様を考察したい。

2. アムハラ の織布の歴史的概要

アムハラの人びとの衣装素材のひとつとなった木綿布は、紀元前後には既に航海交易によって、その多くがインドやエジプトからもたらされていた。そして、現在のエチオピア北部からエリトリア一帯に成立したアクスム王国の交易港・アドゥリスは、単なる交易港のひとつとしてだけでなく、インドとエジプトの交易の中継地としても栄えた。また、

同王国はスエズ湾沿岸部をはじめ、アラビア半島やアフリカ大陸東海岸・現在のタンザニア沿岸部などの各地へエジプトやインド産布の輸送を担っていた。そのため、アクスム王国は「布の交易」によって繁栄し、その勢力を拡大した。

アクスム王国の衰退後もエチオピア北部には、綿花や赤色染色糸、金銀糸などの多様な糸をはじめ、絹布やパキスタン産の白色無地布、金の刺繍が施された麻布、腰巻用の更紗布、羊毛製の白色の平織布を使用した衣装など、様々な種類の布や衣料がもたらされた。

一方、13世紀頃のエチオピアの輸出品については、香料や象牙などの他に男性奴隷や女中用の奴隷、ショール、ターバンが記録されている。つまり、遅くとも13世紀頃にはエチオピアで既に布の生産が行われ、輸出するほどになったと捉えることができる。

15世紀以降の西洋諸国がアフリカ進出を開始した、大航海時代がはじまると、ヨーロッパから派遣された使節団や旅行家たちが当時のエチオピアを廻り、旅行記を著した。そのひとつである『エチオピア王国誌』[アルヴィレス 1980 (1540)]には、「キリスト教の修道士のなかには、胸の前のそれぞれ両側に、細長い布が横に縫い付けてある衣装を着用している」[アルヴィレス 1980: 33]と当時の衣装のかたちについての記録がある。また、織布の利用方法について、当時の人びとの間では、布を衣料として使用するだけでなく、買い物での支払いや税金などに布を「通貨」として用いていたことや、驢馬や牛といった大型の家畜と同価値であったとされる。

そのため、16世紀頃のエチオピアでは、布が高価なものとして扱われていたことを窺うことができる。

3. イコン画にみるアムハラの衣装

エチオピア北部の多くの教会や修道院には、キリストや聖母マリアなどの聖人やかれらの生涯、聖書の一場面などを題材としたイコン画が遺されている。そのなかに文様の施された布や様々な衣装を確認することができる。

例えば、13世紀頃に建てられたアブナ・イエマタ教会のイコン画には、赤色と青色のタテ縞文様や、白色と赤色のタテ縞文様の衣装を身に着け、頭に大きな布を巻いた聖人の姿が描かれている。一方、16世紀頃に建てられたアブラハ・アツパハ修道院のイコン画には、当時の一般の人びとの様子が描かれ、彼らは白地に赤色の細幅縞文様が織りこまれた布を身体に巻きつけるように着用している。このように、当時の衣装は、その身分によって布の文様や色に違いがみられるが、布を身体に巻きつけるように着用するといった共通性がある。このような布を衣装として着用する方法は、今日のアムハラの人びとの間でもみることができる。

4. 今日のアムハラの衣装

今日のエチオピアでは、さまざまな織布が日常の衣料に使用され、特に、ガーゼのような風合いで白色の広幅木綿布を衣装とするナタラ、コタ、ガビと呼ばれる3種類の衣装は、その代表的なものである。

アムハラの人びとは、これらの衣装の着用時に織布のタテやヨコの方向を変える、あるいは文様の位置を変えるだけで、その時の目的を他者に対して伝えることができる。

例えば、主に女性が着用するナタラは、教会への参詣時には、横長に広げた状態で身体

に巻きつけ、文様が身体の下になるように着用する。葬式では、同じナタラを使って正方形になるように横半分に折り、その状態で頭部に文様部分を固定してから身体に巻く。

5. おわりに

これまで、アムハラの織布は、単に、「透けるような薄さで真っ白な平織りの布」とその概観だけによって特徴づけられてきた。しかし、彼らは、同じ織布の着用方法を変化させることで「儀礼着」や「普段着」として用いている。言い換えれば、貧富や身分の差に関わらず、布1枚さえ持っていれば、さまざまな場面にあった服装と成り得る、といった多用途性を見出すことができる。また、エチオピア北部の伝統的衣料として継承されてきた織布は、透けるような薄さが特徴であり、これは、着用の際に大きな布が重なり合うと、そこに暖かい空気が貯まることから、薄い木綿布の衣装は、たとえ1枚であっても保温性に優れているといった特質がある。すなわち、彼らが居住するアビシニア高地という、標高が高く、朝夕の寒冷な生活環境に応じた衣料といえる。そして、大衆の面前で衣装がはだけることや、それを何度も羽織りなおすことを不謹慎とされるため、衣装となる織布のタテ糸・ヨコ糸の密度を粗く、ガーゼにも似た柔らかな風合いに織り出すことによって、その粗くて薄い布が身体に密着して着用することができる。つまり、彼らの居住環境や生活、そして慣習に、最も適した布の状態が透けるほどの薄さとなる。

以上のことから、アムハラの織布に介在するこのような価値観や知識や持つ人びとによって、安価な布が入手可能な現代にあっても、伝統的な、真っ白で透けるように薄い平織りの布が継承されてきた、と捉えることができる。